対人援助学＆心理学の縦横無尽（30）

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学におけるTEMとヤーンのネットワークの拡大（2）2009年から

サトウタツヤ・木戸彩恵・土元哲平・安田裕子

目次

1　Valsiner教授と日本の心理学
1－1　はじめに
1－2　ヤーンの考えを知る
1－3　シンポジウム後のヤーンの感想と驚くべきオファー
1－4　2004年1，2月における日本の研究者との交流
2　始動するプロジェクト群　ICPシンポジウム・HSS章の執筆
2－1　「Historically Structured Sampling (HSS)」に関する理論的思考と執筆
2－2　データ分析から生み出されたアイディア
2－3　ヤーンのネットワークへの参入　ブートキャンプ
2－4　ネットワークのさらなる拡大
以上　前稿（1）　15.pdf (humanservices.jp)

以下本稿
3　広がる文化心理学ネットワーク
3－1　ネットワークの拡がり2008年以降
3－2　大学院生たちのネットワーク
3－3　Fukushimaを訪問した海外の仲間たち
3－4　立命館大学総合心理学部の設立、ヤーンが再び立命館大学客員教授に
4　TEA（複線径路等至性アプローチ）の未来へ向けて
4－1　TEAの発展　国際TEA学会という未来
4－2　日本質的心理学会がヤーンに学会貢献大賞を授賞する
4－3　立命館大学とオールボー大学の連携
4－4　結語：ヤーンの古希を寿ぐ

3 広がる文化心理学ネットワーク

3－1　ネットワークの拡がり2008年以降

第1著者・サトウタツヤは、2008年にエストニアを訪問したのをきっかけに、以下のような国々を訪問し（表1）、ヤーンの文化心理学ネットワークに参加することになる。私たちは多くの文化心理学者と知り合い、学術交流のみならず友情を育むことができた。また、そのうちの何人かを立命館大学の客員教授として招聘することができたし、こちらから様々な国を訪問することもできた。

表１　Tatsuya Sato の海外の文化心理学の仲間たちとの交流

年月	国	大学等	用務
2008			
12	エストニア	タリン大学	博士論文副査
2011			
01	イタリア	サレント 大学	TEA 講演
2012			
01	イタリア	サレント 大学　サレルノ大学	TEA 講演
02	ブラジル	バイア州立大学　サンパウロ大学	Cultural psychology
2013			
03	イタリア/デンマーク	サレント 大学　オールボー 大学,	
05	ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス: LSE		Idiographic Approach
2014			
03	ブラジル	バイア州立大学　サンパウロ大学	Cultural psychology
04	デンマーク	オールボー 大学	Cultural psychology
08	デンマーク	コペンハーゲン 大学	サマースクール
11	スイス/ルクセンブルグ	ヌーシャテル 大学　ルクセンブルグ大学	TEA 講演
2016			
10	イタリア	ナポリ	Idiographic Approach to Health
11	ノルウェー	ノルウェイ科学技術大学（NTNU）	TEA 講演
2019			
03	イタリア/スイス	ローマ大学・サレント大学・ヌーシャテル大学	

これらの訪問はいずれも価値あるもので豊かな交流を作り出したが、中でもブラジルで２回にわたって行われた「文化心理学セミナー」は、参加した私たちにとってとりわけ感慨深いものがあった。なにせ、日本からみれば地球の裏側であり移動だけで 40 時間はかかる国なのである。これらのセミナーはバイア大学のアナ＝セシリア・バストス（Bastos）教授が主催したもので 2012 年が第 2 回文化心理学セミナー、2014 年が第 3 回文化心理学セミナーであった。いずれも海沿いの素敵なコテージでの開催であり、優雅なセミナーであった。

2012 年のセミナーにおいては、バイア大学の研究グループが「母性を巡る移行（transition）と未定性（uncertainty）」に関する研究を発表した。多くの研究で TEM（複線径路等至性モデリング）が使われており、第 1 著者はそれに対して研究法上のコメントを行った。この時、日本人の参加者は第 1 著者のみであったが、大変暖かい雰囲気で歓迎してもらった。

図１　第 2 回文化心理学セミナー（2012 年；ブラジル・バイア）

2014 年の第 3 回会議は、“Conceptualizing Catalysis in Theory and Practice”というタイトルで開催された。立命館大学サトゼミ関係からは第 1・2・4 著者を含め 7 人が参加した。また、湘北短期大学（当時）の岡本依子も参加した。

図 2　第 3 回文化心理学セミナー（2014 年；ブラジル・バイア）

ヤーンはかつてアナ＝セシリアとその仲間を"TEM philia（テム愛好者／嗜癖者）"だと冗談めかして私に説明したことがある。褒めているのかけなしているのか微妙だが（笑）、確かにアナ＝セシリア・バストス教授と彼女の同僚や学生たちは TEM を愛してくれている。そもそも彼女たちは”Contexto e trajectórias de desenvolvimento（CONTRADES）”という文化心理学的な研究プロジェクトを永年にわたり行っていた。そして、TEM と出会ってからこの方法論を使っていくつもの研究成果を産出することが可能になったことを喜んでくれているのである。エルサ、ヴィヴィアン、タチアナ、マリア、アンジェラ、リヴィア。多くが大学の教授たちである。ブラジルにこんなにも多くの友人ができるとは誰が想像しただろうか？マリア・ライラこと Lyra ら（2018）の研究は、現代ブラジルの状況下で養子縁組を決めた二組の夫婦の分析を TEA（複線径路等至性アプローチ）によって行ったものである。

ブラジルの文化心理学セミナーには毎回でも参加したいのであるが、開催時期が 3 月ではなく 4 月になることもあって－年度始めの海外出張は難しいために－4 月開催の時は参加できなかった。2020 年は 3 月に開催される予定であったから第 1 著者と第 3 著者・土元哲平は参加する気満々であったが、コロナ禍により会そのものが中止となった。再びブラジルの地を踏むのはいつになるのだろうか？

なお、時間は前後するが、ヤーンは 2013 年にアメリカ・クラーク大学からデンマーク・オールボー大学に異動した（Niels Bohr 記念講座の教授）。3 月に記念の講義（Niels Bohr Lecture）が行われ、第 1 著者・第 2 著者・安田裕子・神崎真実が参加した。

図 3　2013 年の Niels Bohr Lecture（オールボー大学）

また第 1 著者は 2014 年 4 月にオールボー大学を訪問し主に PBL（プロジェクト・ベースト・ラーニング）について調査を行った。この時、同大学のモーンス（Mogens Jensen）が様々なアレンジをしてくれた。後に始まる（2019）両大学の学生交流のプログラム化の端緒であったかもしれない。この時の様子は「オールボー大学の PBL」として『対人援助学マガジン』に寄稿した。
17.pdf (humanservices.jp)

図 4　2014 年モーンスらと共に（オールボー大学）

2014 年についていえば、第 1 著者は８月には再びデンマークに舞い戻りコペンハーゲン大学のペニーラが企画を立てたサマースクールに講師陣の一員として参加した。1 年に 2 回もデンマークに行けた時が懐かしい。写真は、ヤーンを含む講師陣でエチオピア料理を食べに行ってきた時のショットである。左から、ブレィディ、ヤーン、タニア、ペニーラ、サトウタツヤである。

図 5　2014 年、エチオピア料理を食す（デンマークにて）

3－2　大学院生たちのネットワーク

第 1 著者だけではなく大学院生達も文化心理学のネットワークに積極的に参加した。また海外の文化心理学関係の研究者が日本に来るなど積極的な交流が行われた。

第 2～4 著者はいずれも立命館大学の大学院生として過ごした時期がある。彼らとヤーンおよびそのネットワークとの関わりについて紹介していこう。

第 4 著者は 2004 年に立命館大学大学院応用人間科学研究科修士課程を修了し 4 月から文学研究科博士課程後期課程に進学した（その後中途退学）。彼女は修士論文のために収集したデータをもとに等至性（Equifinality）概念に依拠して論文の執筆に取りかかり、TEA が主題となった世界最初の論文となった(安田、2005)。そんな彼女が初めてヤーンに出会ったのは、北京で行われた国際心理学会（ICP）の時である。彼女はホテルのランチバイキングをごちそうになり、なんて素敵な先生なんだと感動したことをよく覚えている。その後、彼女はクラーク大学を 2 度にわたって訪問し、いずれも、クラーク大学近くにあるマンションに住まわせてもらった。宿泊のアレンジをはじめ、すぐに海外での生活を成り立たせることができるように、ヤーンは細々と取り計らってくれた。ヤーンの人間的な温かさは、グローバルに研究することの素晴らしさを、彼女に教えてくれた。2014 年にはブラジルで行われた第 3 回文化心理学セミナーに参加した。彼女はいま立命館大学総合心理学部で臨床心理学／質的研究法の教授として働いている。

第 2 著者・木戸彩恵は 2004 年に文化心理学シンポジウムが開催された時は学部生で、スタッフとして働いていたためヤーンと直接の接点はなかった。彼女は 2004 年 3 月に立命館大学を卒業して文学研究科博士課程前期課程に入学した。学部時代のテーマである化粧心理学の研究に TEM を用いることにして、第 4 著者と同じ時に ICP でヤーンと出会った。その後、彼女はクラーク大学に滞在して修士論文のためのインタビューを行ったり、国際会議や研究会、文化心理学のサマースクールなどで、文化心理学ネットワークと交流した。2014 年にはブラジルで行われた第 3 回文化心理学セミナーに参加した。彼女は文化心理学のネットワークを有効に活用したひとりであるが、特にスイスのタニア・ズウィットン（Tania Zittoun）教授のもとにも研究のために滞在し親交を深めた。そして、彼女は 2019 年には同教授を日本発達心理学会の集中セミナーのゲストとして日本に招聘した。彼女はいま関西大学文学部で文化心理学の准教授として働いている。

第 3 著者は鹿児島大学の学部・修士課程を経て 2017 年に立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程に入学した。彼がヤーンと初めて出会ったのは 2017 年 8 月であった。第 3 著者はゼミの先輩たちがヤーンのもとで学んでいるのを見聞きして、大学の資金を得てオールボーに滞在することを計画した。彼は幸運にも資金を獲得でき 2018 年 2 月に「The Niels Bohr Lectures 2018」に参加するためにデンマークを、次いでトランジションとライフコース論について学ぶためにスイスのタニアのもとを訪問した。その後も何度か海外を訪れるとともに、ヤーンが立命館大学の客員教授として来日した 2018，2019 年には、受講生（大学院生）とヤーンの橋渡し役として活躍した。21 年現在、彼は OIC 総合研究機構で PD として研究に勤しんでいる。

今回の著者以外にも、第 1 著者に関係する大学院生の多くがネットワークに参加しているが、特に滑田明暢、

日高友郎、神崎真実たちが濃厚な交流をしてきたと言える。

立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学（当時）滑田明暢の活動については前稿で紹介した。2014年にブラジルで行われた第3回文化心理学セミナーにも出席した。彼は現在、静岡大学専任講師を務めている。

2010年1月には、立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学（当時）の日高友郎がクラーク大学で2ヶ月を過ごした。この時はエストニアから来ていた大学院生のキリル・マズロフ（Kirill Maslov）と親しくなった。彼は現在、福島県立医科大学専任講師を務めている。

ヤーンと最も濃厚な交流をした大学院生のひとりが神崎真実であろう。神崎は2013年に立命館大学文学部を卒業して文学研究科博士課程前期／後期課程を経て2017年に博士号を取得した。卒業論文のタイトルは「通信制高校のマイクロ・エスノグラフィー」であるが、発生の三層モデルを組み込んだという意味で、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関するものであった。彼女は一貫してマイクロ・エスノグラフィーに取り組み博士号を得て、2021年現在は立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）のPDとして勤務している。彼女は2013年のヤーン・ヴァルシナー教授着任記念講演（デンマーク）で初めてヤーンと出会った。2014年にはブラジルで行われた第3回文化心理学セミナーに参加した。2015年には2度にわたってデンマークを訪問し、文化心理学について学んだ。特に2015年8〜10月にかけて58日間にわたって滞在した。この時の交流をもとに2016年には横浜で行われた国際心理学会でモーンスと共にシンポジウムを行った。その成果は「Contextualized Understanding of and Transdisciplinary Approaches to School Dropout」という章として、『Cultural Psychology of Education』シリーズの『Educating Adolescents Around the Globe』に掲載された。2016年には第1著者と共にノルウェーに行き、The 18th Conference on Social Community Psychologyに参加した。ノルウェーではノルウェー科学技術大学（Norwegian University of Science and Technology; NTNU）のロアーことHroar Klempe教授にお世話になり自宅パーティにもご招待いただいた。

図6　2016年神崎真実がノルウェーを訪問（ロアーは左奥すみ）

2019年にはイタリアを訪問した。日本でのTransnational meeting on TEAの開催にあたっては常に裏方として運営スタッフをしてくれている。

2009年7月には、クラーク大学大学院生のザック・ベックステッド（Zack Beckstead）が立命館大学に短期留学を果たした。

図 7　2009 年に来日したザック（創思館にて MTG）

彼は翌 2010 年 7 月にも来日した。当時のサトゼミ 6 期生たちと交流していた姿が懐かしい。2009 年には博士号を取得したカトリン・クラセップも来日した。

3－3　Fukushima を訪問した海外の仲間たち

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故（2011）の余韻もさめやらぬ 2012 年 6 月にはエストニアから Katrin Kullasepp が来日し、広島大学・立命館大学で講演を行い、東日本大震災後の被災地・福島を訪問した。彼女はさくらんぼ種とばし大会に飛び入り参加し優勝した。第 1 著者、第 2 著者と共に、当時大学院生だった春日秀朗が同行した。彼は、2013 年 2～3 月にかけてエストニアを訪問し、彼の専門である青年の調査を行い、その結果は博士論文の一部を構成することになった。

図 9　2012 年に来日したカトリン（福島県飯舘村役場にて）

2013 年 11 月には立命館大学訪問教授になった Tania Zittoun が来日し（表 2 参照）、福島を訪問した。

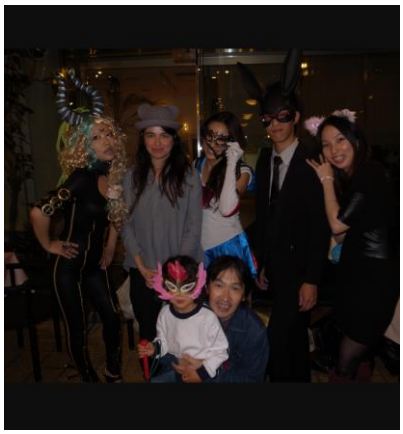

図 10　2013 年に来日したタニアの活動（福島訪問とハロウィンパーティ）

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から 3 年後の 2014 年 7 月 7 日、福島市にある浪江町からの避難者仮設住宅をブレディ・ワゴナー、エリック・ジェンセン、私の 3 人で訪問した。避難者のリーダーに話を聞いた後、避難者の S さんを紹介してもらい避難者仮設住宅にお邪魔させてもらった。

図 8　福島市の避難住宅での写真（2014 年）

私たちが部屋に入った時、壁に貼ってあった絵が私たちの目を捉えた。白いスーツに身を包んだ男たちが現場を歩いている写真である。私たちは津波に襲われて原発が爆発した後の救助活動に焦点を当てた写真ではないかと想像できた。このような場合、日本人は決して疑問を口にしない。質問自体が失礼なマナーとされているからである。しかし、「外国人」がこの写真は何か？という質問をしたとき、S さんの口から意外な言葉が出てきた。彼女はふるさとの写真を飾っているのだと言った。この意外な答えをどう理解すればいいのだろうか。それはデンマークの心理学者ルビン（1915）の「図と地」の反転のようなものだったのである。白い作業スーツを着た男たちは S さんにとっての図ではなくむしろ地（背景）であり、丘こそが S さんにとっての図であり、故郷を想起させるものであった。壁に貼られた写真は、彼女が避難生活を送っていた頃の故郷を想像させるものだったのである（Zittoun and Sato, 2018）。

S さんは別れ際に「来てくれてありがとう、福島の人たちを忘れないでいてくれてありがとう」という言葉で、自分の生活空間に侵入してくる突然の闖入者（奇妙なゲスト）に語りかけてくれた。

3－4　立命館大学総合心理学部の設立、ヤーンが再び立命館大学客員教授に

立命館大学における心理学の研究・教育体制も大きな変貌をとげた。立命館大学文学部心理学専攻は総合心理学部として独立し（2016）、学生定員 280 名、教員数 30 名（倍増）になり、場所も京都から大阪茨木市（OIC）に移転した。以降、シンポジウムなどのイベントは京都・衣笠ではなく OIC で開催されることになった。2016 年 7 月に行われた立命館大学総合心理学部設立記念のセミナー「文化心理学の新展開」には、ヤーンとセルジオこと Sergio・Salvatore 教授（イタリア）が出席し、それぞれ講演を行った。ヤーンは「TEA（複線径路等至性アプローチ）と文化心理学」という講演を行った。これは横浜で行われた国際心理学会（ICP）のために来日したヤーンの仲間達を立命館大学総合心理学部に招くという意図のもと行われたものである。佐藤隆夫学部長（当時）

も立命館大学総合心理学部における文化心理学の意義を理解してシンポジウムにも参加してくれた。

図 11　2016 年　総合心理学部創立記念セミナー「文化心理学の新展開」

2018 年には立命館大学に新しい博士課程（人間科学研究科）が発足し、ヤーンはその客員教授として 3 年間にわたり 5 月に集中講義を行った。また、総合心理学セミナーも行った。この新しい大学院には、TEA（複線径路等至性アプローチ）を学ぶという明確な目的をもった大学院生が多数入学してきた。彼／女らは看護・日本語教育・キャリア支援等の実践に TEA（複線径路等至性アプローチ）を活用する目的で博士課程後期課程に入学してきており、彼／女らがヤーンと直接出会う貴重な機会となった。ヤーンは 2019 年も来日を果たし集中講義を行ったが、2020 年度の講義（2021 年 1 月）はオンラインとなった。

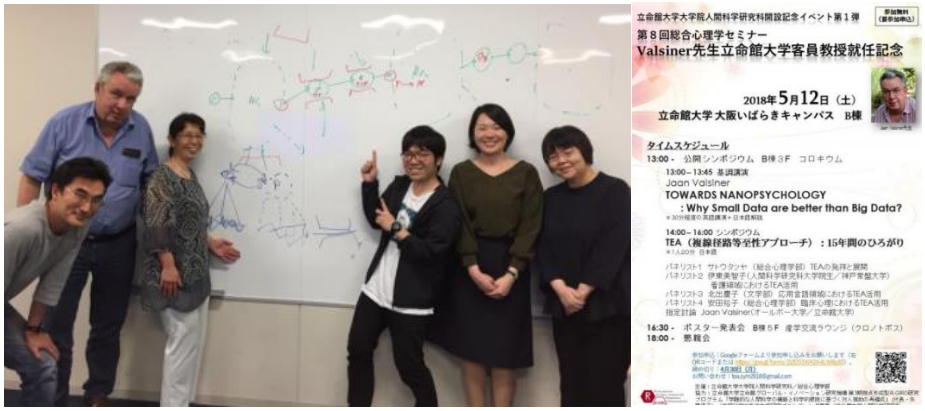

図 12　2018 年 5 月の Valsiner 教授集中講義とセミナーのポスター

2019 年 11 月 11 日にはそれぞれ別の目的で来日した文化心理学関係の仲間達の来日予定日程が偶然にも同じ時期になったため、3 人が同じ日に立命館大学 OIC に集まり、総合心理学部の授業「社会の中の心理学」におけるゲストトークを行い、また、専門家向けの「文化心理学セミナー：スペイン・スイス・ノルウェーの研究者を迎えて」を開催した。スイスからタニア（Tania Zittoun）、スペインからマリオ（MARIO CARRETERO）、ノルウェーからオルガ（Olga　Lehman）が同じ時期に来日したのである。また、日高友郎（福島県立医科大学）、滑田明暢（静岡大学）、神崎真実（立命館大学）なども集まった。第 2 著者は聴衆として参加した。

立命館大学はヤーンを中心とした文化心理学ネットワークの中で、必須通過点として認知されつつあると言っても過言ではない。

図 13　2019 年 11 月の文化心理学セミナー＠立命館大学に集まった仲間達

4　TEA（複線径路等至性アプローチ）の未来へ向けて

4－1　TEA の発展　国際 TEA 学会という未来

私達とヤーンの関係の基盤の中心には、TEA（複線径路等至性アプローチ）がある。2016 年には英語版の書籍が出版された（Sato, Mori and Valsiner, 2016）。この本の目次が示すように、日本の研究者以外に、デンマーク、イギリス、エストニア、オランダ、ブラジル、ボリビア等から執筆者が参加しており、Transnational な雰囲気を醸し出している。

表 2　『Making of the future』の目次（Sato, Mori and Valsiner, 2016）

- Introduction: from TEM to TEA : the making of a new approach / Tatsuya Sato
- Imagining the past and remembering the future : how the unreal defines the real / Tania Zittoun and Jaan Valsiner
- The trajectory equifinality model (TEM) as a general tool for understanding human life course within irreversible time / Tatsuya Sato and Hitomi Tanimura
- Mapping trajectories of becoming a psychologist / Katrin Kullasepp
- How can the diversity of human lives be expressed using TEM? : depicting the experiences and choices of infertile women unable to conceive after infertility treatment / Yuko Yasuda
- Exploring the transgenerational transmission of trauma in a cultural life course perspective / Nina Dalgaard and Pernille Hviid
- Meaning construction and its transformation in narratives about music with a personal meaning : music therapy in group counseling for juvenile delinquents / Kakuko Matsumoto
- TEM and dialogical self theory : how to understand a marriage problem? / Hubert Hermans
- Composition-work and TEM : studying the self in irreversible time / Agnieszka Konopka and Wim van Beers
- A dialogical self : trajectory equifinality model for higher education persistence/abandoning of study / Mauricio Cortés
- Contribution of TEM to lifespan development psychology from life story / Masakuni Tagaki
- From the as if to the as is : the emergence of a research project / Eugenia Gouvedari
- TEM model and Brazilian research on developmental transitions / Ana Cecília Bastos
- Extending the trajectory equifinality model's conceptual and methodological toolkit to account for continuous development / Eric Jensen and Brady Wagoner.

この本において、ヤーンは（タニアと一緒に書いた原稿の中で）、何故彼自身が TEM のことを好きなのか、

その理由を 4 つ上げている（Zittoun and Valsiner, 2016）。
第一に、TEM はその全容が質的である。
第二に、TEM は単一の、独特な実例に基づいて一般化をする。
第三に、TEM は「測定」することができない。一方、心理学はその実用的な精緻化において、従来「測定」と呼ばれている操作に依存している。
第四に、TEM は、発達中のシステムの意味を理解する上での「最小のゲシュタルト（Minimal Gestalt）」である。それは、現象を要素論的なものとして捉えている私たちの基本的な前提に挑戦するものである。

なお、TEA は日本において、心理学を含む多くの学範（ディシプリン）で興味を持たれており、右肩上がりで公刊論文が増えている。

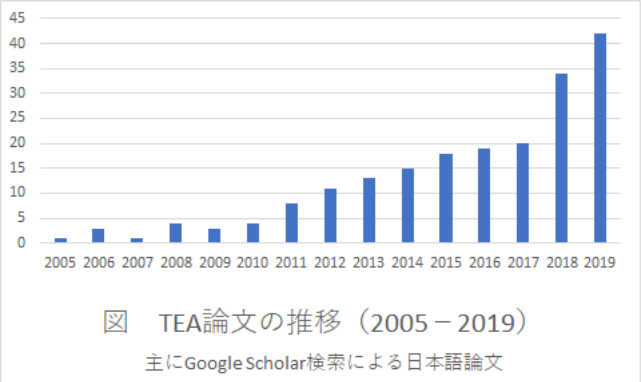

図 14　TEA を用いた文献数の推移（2005－2009）

こうした状況のもと 2019 年 3 月に TEA に関する Transnational Meeting(トランスナショナル・ミーティング)が開始された。同年 9 月にはヤーンが人間科学研究科で集中講義を行うのにあわせて第 2 回大会が日本で開催され、インドネシア・スラバヤ大学のアナンタ・ユディアルソ（Ananta Yudiarso）准教授が学生とともに参加した。

図 15　2019 年スラバヤ大学のユディアルソ准教授と共に

2020 年 3 月にはブラジル・バイアで第 3 回大会が行われる予定であったが、コロナ禍の影響でオンラインでの開催となった。だが TEA の国際展開の勢いは今後も続いていくだろう。

4－2　日本質的心理学会がヤーンに学会貢献大賞を授賞する

2019 年、ヤーンは何度目かの来日を果たした。そして、立命館大学での講義、日本心理学会での講演（13, Sep）、Trans-national Meeting on TEA（15, Sep）への参加、JAQP での講演、など、非常にエネルギッシュな日々を過ごした。

日本質的心理学会でヤーンは「REMAINING ELEGANT: Fifteen years of qualitative psychology in Japan」という講演を行った。以下に要旨を掲げる。

科学としての心理学は、20 世紀の大部分を除いて、質的な性質を持っている。心理学の現象の多くは、原則として定量化できないものであり、その性質上、定量化の実践は非科学的なものとなっている。2004 年に日本の心理学で質的な方向性が出てきたことは、複雑な心理学の形態とそのダイナミクスの本質が評価されてきたことを示している。サトウタツヤが開発した TEA（Trajectory Equifinality Approach）は、心理学が社会的に敏感に人間の幸福に貢献していることを示すとともに、新しい研究方法論をエレガントに増殖させたものである。 このエレガントな視点をさらに発展させるために、TEA の現場理論的拡張の可能性を概説する。

この講演の最後のスライドには「優雅さは１５年たっても続く（しかし、発達するには、自身の美しさを楽しむことをやめてしまわないことが必要である）」と記されていた。

この年、日本質的心理学会はヤーンに貢献賞を授与した。授賞理由は次の通りである。

ヴァルシナー教授は、1985 年に『Culture and Psychology』を創刊するなど、長きに渡って世界の質的研究の発展に大いに貢献してきた。日本質的心理学会においては、2004 年に開催された第 1 回大会で講演を行った（その内容は『質的心理学研究』第４号(2005)に公刊されている）。以来、常に日本の質的心理学に寄り添い、その質的向上はもとより、国際化にも尽力してきた。その長年の功績に敬意を表し、特別賞を贈ることとした。

授賞式で賞を授与したのは、同学会の理事長・サトウタツヤ（2019～2021 年）であった。両者の友情に基づく知的交流が公的にも認められた瞬間であるとも言える。

図 16　2019　日本質的心理学会学会貢献大賞を日本質的心理学会長から授与されるヤーン

図 17　2019　日本質的心理学会学会貢献大賞を受賞したヤーン
（浅井教授が、日本質的心理学会学会賞を受賞 ｜ 桜美林大学（obirin.ac.jp））

ヤーンはその 1 年後『質的心理学フォーラム』（vol.12）に、「学会受賞者のコメント」という記事を執筆した。

この賞を受賞してから約 1 年が経過した今、私は各国の質的方法論の議論がどのように機能しているのかをじっくりと考えているところです。日本の質的研究が、イデオロギー的なものではなく、現象に基づいた自律的なものであることは、とても嬉しいことです。対照的に欧米では、質的方法をめぐる言説はイデオロギー的に燃えさかっており、量的方法を敵視していることが多いものです。しかし、それは間違っています--そもそも量的方法を質的方法の下位分類として見る必要があるのです。量的な方法というのは、最小限の質的な違いである 0 と 1 の違いを数量として扱うことにほかならず、それは質的方法の下位分類でしかないのですから。

こうしたコメントからも、ヤーンが日本の質的研究の独自性を強く評価していることがわかる。

4－3　立命館大学とオールボー大学の連携

ヤーンがオールボー大学に異動し、立命館大学で総合心理学部が設立された（前述）ことで、２つの大学の交流が深化していくことになった。2016 年 7 月に行われた立命館大学総合心理学部設立記念の文化心理学セミナーには、ヤーンとセルジオ（Sergio Salvatore）が出席し、それぞれ講演を行った。ヤーンの講演タイトルは「TEA（複線径路等至性アプローチ）と文化心理学」であった。立命館大学から 2017 年には山口洋典（立命館大学共通教育機構）が、2019 年 4 月には第 4 著者が、それぞれサバティカルでオールボー大学に滞在した。

こうした関係を基盤に、2019 年には両大学は連携覚書（Memorandum）を締結した。学生交流のための単位互換制度の端緒が作られた。2020 年 3 月、第 1 著者が引率して立命館大学の学生 5 名がオールボー大学を訪問し、文化心理学を学びフィールドワークを行い学生と交流した。受け入れはモーンスこと Mogens Jensen 准教授、サ

ラこと Sarah Awad 助教とポーラこと Paula Cavada-Hrepich 助教の 3 名で、モーンスが中心になってアレンジしてくれた。立命館大学の学生が訪問したときの様子がオールボー大学のホームページで紹介されている。

図 18　2020 年　オールボー大学を訪問した立命館大学の学生たち
show（aau.dk）

2020 年 3 月 11 日夜、デンマーク政府が Covid19 の感染症拡大をうけて大学を閉鎖する決定を下したこともあり、プログラムは一日短縮で終了した。なお、第 1 著者が現時点（2021 年 5 月）で振り返るなら、悔しいというより安堵の気持ちが大きい。日程がもう少し遅く計画されていたなら全く実行できなかったかもしれないからである。実際、2020 年度のこの事業はオンライン交流会形式で行われた。

4－4　結語：ヤーンの古希を寿ぐ

2004 年に実質的に始まったヤーンと私たち日本人心理学者の交流は、文化心理学のネットワーク全体の活性化につながった。また私たちの交流の基盤には常に TEA（複線径路等至性アプローチ）があり、この TEA 自体の発展も著しいものがある。また、交流の範囲が大学院生のみならず、立命館大学とオールボー大学の学部生にまで拡がったことは最初期には想像できなかった展開であり、大きな意味があるだろう。

「最初期には想像できなかった」ということでいえば、立命館大学文学部の心理学専攻が総合心理学部という学部になる（becoming）ことも全く想像できなかったことであった。こうした偶発的出来事も追い風にしながらヤーンとの交流は長く続いてきたのである。

TEA（複線径路等至性アプローチ）の発展もとどまるところを知らない。TEM（複線径路等至性モデリング）に関するメーリングリストの登録者は日本国内で 700 名以上になっており、TEA 分析学会の設立が取り沙汰されている。また、フランスの哲学者・シモンドン（Gilbert Simondon, 1924-1989）が 1958 年に提出した博士論文が公刊された『個体化の哲学』（Simondon, 2013/2018）で言及されている展結（Transduction）という概念が TEA（複線径路等至性アプローチ）に新しい息吹を与える可能性がある。ヤーンと共に活発な議論が行われはじめたところである。

70 歳を祝うことを日本では「古希」という。古希は、70 歳まで生きることがいかに珍しいことかを表現した杜甫の有名な漢詩『曲江』に由来している。私たちは、世界中の多くの日本の心理学者や文化心理学者と一緒に彼の満 70 歳の誕生日を祝うことができて幸せである。

引用文献

Kanzaki, M., Jensen, M., Kawamata, T., & Onohara, A. (2020). Contextualised Understanding of and Transdisciplinary Approaches to School Dropout BT. In M. Watzlawik & A. Burkholder (Eds.), *Educating Adolescents Around the Globe: Becoming Who You Are in a World Full of Expectations* (pp. 265–282). Springer International Publishing. https://doi.org/10.1007/978-3-030-37900-1_14

Lyra, M. C., Valério, T. A. de M., & Wagoner, B. (2018). Pathways to life course changes: Introducing the concept of Avenues of Directive Meaning. Culture & Psychology, 24(4), 443–459. https://doi.org/10.1177/1354067X18779060

Sato, T., Mori, N., & Valsiner, J. (2016). Making of the future: The Trajectory Equifinality Approach in cultural psychology. Information Age Publishing.

Simondon, G. (2013). *L'Individuation à la lumière des notions de forme et d'information*. Millon. (藤井 千佳世, 監訳 (2018). 個体化の哲学：形相と情報の概念を手がかりに. 法政大学出版局.

安田裕子.（2005）. 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程――治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226.

Zittoun, T., & Valsiner, J. (2016). Imagining the past and remembering the future: how the unreal defines the real. In T. Sato, N. Mori & J. Valsiner (Eds.), Making of the future: the trajectory equifinality approach in cultural psychology (pp. 3-19). Charlotte, NC: Information Age Publishing.

Zittoun, T., & Sato, T. (2018). Imagination in adults and the aging person: Possible futures and actual past. In *Handbook of imagination and culture.* (pp. 187–208). Oxford University Press.

参考ウェブサイト

Aalborg University　09.03.2020 “VISIT FROM RITSUMEIKAN UNIVERSITY”
https://www.ccp.aau.dk/news/show/visit-from-ritsumeikan-university.cid454007

Construction of Transnational Network for サトゼミ
https://sites.google.com/site/satozemiguest/

桜美林大学　2019/09/25（水）　浅井教授が、日本質的心理学会学会賞を受賞
https://www.obirin.ac.jp/info/year_2019/r11i8i000002z3qi.html

サトゼミ 研究者来訪記　ver.2（2012～）
https://sites.google.com/site/satozemiguest2/2013

対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル
http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス
http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、８月オランダ、デンマーク
http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf

Jaan Valsiner 先生、2018 年５月の滞在記
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf